

彙報

戰爭と學術

北部佛蘭西アンソンにて今次の戰爭の爲め整頓を開鑿せし際、圖らずもラテン時代に屬する古墳に掘り當てたりといふ。ラテン時代は前史時代に屬するものなるが、此發掘によりて當時の人文上の問題を明晰ならしむ所少からず。又、割逸にては人類學者アツシヤン教授が捕虜に就きて人類學的研究を成したる結果、彼等の中には普通の歐羅巴人は勿論バスク、ブレトン、ワリス、エステン、レットテン、フオンチン、ミンケレリエル、ガルシニエル、ベルグエーデン(猶太人)、西比利亞人、東亞細亞人、中央亞細亞人、印度人、黑人等世界各種の人類を網羅せるを發見せりといふ、而して人類學的研究は獨逸のみに止まらず維納にてもドクトル、ルドルフベンツカ氏測定の事に従ひ、其蒐集したる材料によりて綜合研究を成しつゝあり、又維納の學士院にては該研究の爲めに四千クローチンの支出を可決せりといふ。一國の存亡を賭しての大戦の間にも學術的研究を怠らざる精神はこれを多とすべく是等の研究が公表せられて學界に貢獻するの時も遠き將來にはあらざるべし。

京都文科大學史學科來學年講義題目

史學研究法

國史總論

日本近世史

國史演習

日本社會史

日本中世史

古文書學

日本佛教史に關する事項(演習)

東洋史概説

唐宋時代支那貿易港

東洋史概説

會國藩

講讀(公牘)

最近世史

ビスマルク

西洋史演習

最近世史演習

西洋史概説

ヘレニズム

西洋史演習

原 教 授

内 田 教 授

三 浦 教 授

桑 原 教 授

内 藤 教 授

原 教 授

坂 口 教 授

地理學概説  
 亞細亞地誌  
 地理學史  
 地理學書譜讀  
 地理學實習  
 地理學演習  
 人文地理學  
 物産地理學  
 東洋史概説  
 露清關係  
 考古學概論  
 考古學實習  
 朝鮮史(高麗時代)  
 朝鮮古代史  
 土耳其民族史  
 日本古代史  
 國史地理  
 宋朝史  
 支那金石文  
 ナボレオン時代史

二 小川 教授  
 二 石橋 助教授  
 二 矢野 助教授  
 二 濱田 助教授  
 二 今西 助教授  
 二 羽田 助教授  
 二 喜田 講師  
 一 富岡 講師  
 二 中村 講師

第一卷 彙報 京都文科大學史學科來學年講義題目

平安朝文化史 一 西田 講師  
 人類學 一 足立醫科大學教授

京都帝國大學第七回夏期講演會

京都帝國大學に於ては例により來る八月一日より各種學科の講演會を開く、其内史學地理學に關係ある科目科外講演講師左の如し(尙聽講志望者は京都帝國大學宛來る七月二十日限り申込むべし云ふ。)

希臘文明の世界的影響(幻燈使用) (自八月一日至七日)

文科大學教授 文學博士 坂口 昂

假名に就て (自八月一日至七日)

文科大學助教授 文學士 吉澤義則

天文學一般 (自八月一日至十二日)

理科大學教授 理學博士 新城新藏

主要岩石講義及實物鑑識 (自八月一日至十二日)

理科大學助教授 理學士 比企忠

教育學の民族的研究 (自八月一日至七日)

文科大學教授 文學博士 小西重直

(科外證演)

日本出土の支那古鏡(幻燈使用) (八月二日夜)

文科大學講師 富岡 謙藏

第三號 一五一 (五三八)

希臘の建築と自然景(幻燈使用) (八月四日夜)

文科大學助教 文學士 濱田耕作

京都帝國大學の特別講演

京都帝國大學が毎週金曜日法科大學大講堂に公開して一般の聽講を許しつゝある特別講演は、去四月二十一日より原博士の「戦亂の世界」の講演前後五回に亘りて開かれたり。今其日程及び講演の要項を左に掲げん。

第一回(四月廿一日)

序説(今次の戦役が交戦國の數、交戦區域兵數、死傷者數、軍費、戦闘法等總ての點に於て往古無比、其意義重大なる事)

戦時の英國(内閣改造問題を中心として聯立内閣成立の真相、軍需品問題徴兵問題)

第二回(同廿八日)

戦時の佛國(政府對反對黨の紛議に關する諸問題殊に兵役問題等)

戦時の露國(民主主義の發達) 協商側の軍事上經濟上の連絡關係概要

第三回(五月五日)

戦時の獨逸(獨逸の舉國一致、戦役の死傷數戦役の莫大

軍需品食糧品問題より今次戦役が恰も國防戰の如く國民を激勵せしめたる一因は其地理的位置にあるを論じ、最後に社會民主黨の實相に及ぶ)

第四回(同十二日)

戦時外交(一般經過より塊伊の外交折衝の顛末に及ぶ)

第五回(同十九日)

戰爭の經過(西部及東部戦線バルカン、及土耳其古領方面アフリカ植民地戰爭の概要)

京都文科大學卒業論文

本年度の卒業學生にして史學科並に哲學文學兩科中史學に關係ある卒業論文題目左の如し

史學科(國史專攻)

二宮尊徳の學說及び其事業

今村孝三

尊徳の哲學說より經濟道德等に關する學說並に其事業に就ての新研究にして目次共六冊二千餘頁なりといふ。

哲學科

印度哲學史專攻

眞言密教思想發達史論

鳥越孫三

四明眞言研究

松尾滅禪

シヤンカラ哲學

松野尾慈潮

起信論哲學基礎概念之研究

横田 張 巨

盛衰を述べて沙翁の舞臺道化に及ぶ

森 滋 夫

淨土他力教に於ける世親親鸞の交渉(撰科)奈

波 詠 觀

Robert Herrick.

成田 十四 市

古三論の研究

(撰科)小 坂 準 爾

Robert Burns.

上田 義 夫

支那哲學史專攻

管仲の重なる思想

William Blake.

山本 智 道

周人の家族的並に社會的生活

加 藤 盛 一

Oliver Goldsmith.

姉崎 純 輝

伊藤仁齋の哲學思想

高野 久 太郎

Francis Bacon as a Man and Man of Letters.

石田 憲 次

禮學に於ける鄭王二氏の異同

佐 藤 廣 治

The Life of Robert Burns.

埜上 彪 道

教育學教授法專攻

柳 原 舜 祐

言語學專攻

淺 山 尙

僧堂の制度と教育の理想

柳 原 舜 祐

琉球語の研究

淺 山 尙

文學科

國文學專攻

鈴 鹿 登

例會 大正五年三月廿五日午後一時より文科大學第九教室に於て

古今集に就て

井 手 淳 二 郎

開會、左の講演及關係資料の陳列あり、午後六時閉會。

祝詞研究

松 平 善 次

元代の交鈔に就て

文學士 有 高 應 岩

八犬傳管見

松 平 善 次

右講演の内容は本號叢說欄に掲載するを以て略す。

西鶴の浮世草紙

(撰科)三 財 慶 膽

サー・ウィルリアム・テムプル 文學博士 内 田 銀 藏 君

支那語學支那文學專攻

(撰科)寺 島 德 八 郎

サー・ウィルリアム・テムプルと名づくる人、二人あり、其一人は西

明清の科擧

(撰科)寺 島 德 八 郎

曆一五五五——一六二七年の人、他の一人は一六二八——一六九

英文學專攻

(撰科)寺 島 德 八 郎

九年の人にして、此兩人は祖父と孫なり、祖父テムプルも名ある人

「キャップ、エンド、ヘルス」の沿革特に英國に於ける

ながら、今述べんとするは専ら其孫テムプルに關してなり。孫の

テムブルは有名なる外交家なるが、兼れてまた著述家として知られ、園藝にも大に趣味を有したり。其の雜著中には「武勇論」(The Heroic Virtue)あり、古今の歴史を該博に引用し、或は氣候風土の影響を説き、或は戦争の勝利は人の衆きによらず、訓練と一致和合とに由ることを述べ居るなど、注意を値するものなるが、殊に面白きは、其の中に於て支那論を試み、大に孔子を稱揚し、又支那の文化を憧憬し、支那にては國民の階級は貴族と平民とに分たれずして學者と無學者との二階級より成れりといひ、支那を以て西洋古來の學者が階級に描ける理想國以上に完全なるかの如く記せることなり。彼の雜著中にはまた「痛首の艾療法に就いて」と題し、彼れ自から痛風を療せんとして灸治を試みたることを記せるものあるが、中々趣味ある文なり、なほ艾(Moxa)の事は雜著中「健康と長生とに就いて」といふ文の中にも見たり。「園藝に就いて」と云へる論文中には南歐地方の庭園と、英國の庭園との差別を説き、支那の庭園にも言及へる所あり 云々

て、タウルミナに到り、古代劇場址より朝敵に映せるエトナの火山を望みしが、其風光の明媚なる頗る駿河灣頭富嶽と相似たり。カタニヤに於いては、羅馬時代に於ける圓劇場等を見てシラクサに赴く、同地には希臘建築と文藝復興期以後の建築と相結合せる伽藍の奇建築をはじめ、シラクサ盛時の古城寒寺の遺跡あり。次にゲルチンチに到れば希臘ドリア式の建築の頗る完全に遺存せるもの等あり。パレルモは島中の首府にしてピザンツ式、回教式、ノルマン式等の諸美術相錯綜して奇觀を呈せるは歐洲各地罕に觀る所に屬す。またセリヌント及びセヂエスタは希臘時代の建築の遺れる地にして、前者は山腹に孤立せる古建築の偉觀驚く可く、後者は幾多の大建築の無殘に打倒れたる遺蹟の珍らしき、殊に其附近なる當時の石切場にはセリヌントの戰敗したる瞬間の光景、今に追想するに堪ゆるものあり。要之シチリヤ島は各種文化の輻湊して、多種の美術の遺存せる點に於いて、また希臘時代殊にドリア式の建築の世界中尤も多く且つ完全に残れる點に於いて、美術史家、考古學者等の興味を惹くもの甚大なるものあり云々。尙(寫眞、繪畫書等を陳列して、これが詳細なる説明を加へらる)。

左の講演ありて午後五時散會せり。

シチリア旅行談 文學士 濱田耕作君

大正三年五月伊太利よりシチリヤに渡り、同島を一周して主要なる諸遺跡を視察したり。先づ先年大地震の餘慘憺たるメシナを経

右講演の内容は本誌研究欄に掲載するを以て省畧す。

遺物遺蹟上より見たる九州太古の民族に就いて 文學博士 喜田貞吉君

例會 五月廿七日午後一時より文科大學第九教室に於いて開催、左記の講演ありて、午後六時散會せり。

高野山領莊園に關する研究 文學士 魚澄 總五郎君

高野山領莊園の多くは四至勝手、立券莊號なる一般莊園設立の手續を経たる事實と此等手續履行と共に多く不輸、不入の特權を得たるの事情を文書に徴することを得べし。而して高野山領莊園の内最も所領關係の複雑なる實例は神野眞國莊なり。高野山領莊園職員の主たるものには一般莊園と同じく下司、公文、案主、追補使、刀禰、檢核、田所及び預所等の名を見るも、各莊園に於いて一様に配置せられたるものにあらず、或莊に於いては單に莊官一人を以て莊務を掌らしめし所あり。而して文治以後に於ける地頭と他の莊官との關係は、社會史上注意すべきことにして、高野山以外の文書に於て其關係の一端を見るに、地頭が下司を兼攝せる實例を見、且つ地頭は當然莊官の一人たる下司を兼ねるを普通とする如きを見る。また高野山領に於ても同様の事あることを知らる。これ即武士が幕府の御家人として地頭たると共に莊官の一人となれるにて、武士が社會の不安に乗じて莊園職員の職掌をも掠め經濟上にも實權を握らんとする一つの徑路を示せるものなり年貢米運送の事情はこれを知るべき文書に乏しきも春冬の二回に分ちて運送せる如き、又倉敷地を設定して年貢の貯藏所とせる如

き、間職と稱して年貢運送の特權を有せるもの、存せることを知らる。思ふに莊園で經濟的社會制度は當時に於ける國民が經濟生活の全部を示せるものにして一般農民は富の大を得ること不可能なりとも、土地に固着して、自己の經濟を維持するを得たるなるべし。而してこれら莊地の權利者が多く神社、佛寺等の大團體なりとせば、一莊地に對する支配權者が一人以上に存せしこと、は幾分なりとも土地の兼併に伴ひ生ずる貧富の懸隔を融和することを得たるなるべし云々。

ランプレヒト氏を憶ふ 文學博士 坂口 昂君

ランプレヒト氏の生誕せし一八五六年は恰もコントの晩年に當りランケ、モムゼン、ブルクハルト將たカールマルクスが活動の時代なり。氏が修學時代主として感化を受けし先輩は少時其教を受けたるシュールフアルタの校長ヘルプスト及びワイツゼツゲル、ヘルンハイム、ローセルの諸氏にして彼は特に經濟美術史に興味を有し、後年これに法制史を加へて史家の三大準備的學識と稱せり。一八七八年博士の學位を得、同年 *Beitrag zur Gesch. des franz. Wirtschaftslebens in rhen. Westph. u. Verhältnisse für dieselbe in deutsch. Mittelalter.* を著し、中世の諸事象に統一を認め、彼が將來の史觀研究の進路を示せり。大學卒業後の彼はライン河畔

にあり、ケルン市に於てグイヒマン氏の家庭教師となり傍同地の中學に教鞭を執り、程なくメツイセン氏の愛護を受け、幸福愉快なる生活にありてライン地方の研究に専心努力し、其の結果は Deutsche Wirtschaftsleben im Mittelalter, Skizzen zur rheinische Geschichte の名著に現はれたり。此間彼はボン大學、マルブルグ大學の教授を経て遂にライプツヒヒ大學教授に榮譽せり。而して、に彼はフイン河畔の文化生活研究を擴充して更に獨逸全體の研究に進み、かの畢生の大著述獨逸史十八卷の述作に着手せり、ランケ誕生百年祭はフラクフルトに開かる、や氏は其史學家大會に出席し、所謂ライプツヒヒ案を提出し大多數の賛成を得而して彼は當時の史學界を支配せるランケ派の政治本位國家中心の史風に對し辨難攻撃恒に努め "Vakant", 誌上彼の文化史觀、政治史派攻撃の論文續出せり。彼がランケの攻撃には明かに不注意誇張と認むべき所尠らずして、反對派の烈しき非難を蒙れり。雖も、其獨創的なる史觀、其著述の結構が科學的立脚地にありて而も藝術的態度を重んぜるは注目すべきなり。一九〇六年交換教授として渡米し Americana の著あり、一九〇九年には Königliche Staats-Institut für Kultur u. Universalgeschichte の創設を見たり。彼は又諸種の文化事業に關係し各所の學會を指導し其貢獻する所多大なり。こゝに注意すべきは晩年に及び彼の思想は漸く

圓熟し來り、當初の唯物的態度は變じて唯心的社會心理の考察に傾き、政治的國家的要素に精神的道德的の考慮を加へ來りしを認め得べし。かの一九二二年出版の Einführung in das historische Denken の著は這般の消息を示し居れり。氏は今次戰役に際し奮勵一層努め、平素健康なる身も西部占領地視察に赴き歸後卒然逝去す、實に戰爭の間接的犠牲として公に殉せるものさいふべし。最後に一言し度きは氏が平常我日本に特別の興味を有し且つ近く來遊の暇ありしに戰亂勃發の爲そのことなくして已みしことなりこれ吾人の感慨殊に深きを覺ゆる所以なり云々。

再び大宛國の貴山城に就て 文學博士 桑原 隲 藏君  
白鳥博士が曩に東洋學報に「西域史上の新研究」と題せる長篇を連載し、中に大宛國の首府貴山城は *Kangai* なりとの説を公にせられたるに對し予は昨年藝文誌上に「大宛國の貴山城に就て」といふ一文を載せ、五箇の理由に依りて *Konkent* を貴山城に充つべきを主張せり。然るに博士は又本年三月の東洋學報に「大宛國考」の長編を草して、予の説に一々反駁を加へられしが、其論據孰れも薄弱なれば再び問題を掲げて所見を明かにせん。(一)河流の事は予の議論中一の消極的の理由にして之を以て根據とせざるにあらざりしが、博士は前には河流が問題を決すべき唯一の鍵なりといひ乍ら、今や驟然として河流を絶つ攻め方は「廣く中央亞

細亞の各都市に應用するを得べし」といふに至つては自ら自己の根據を破壊するものにあらすや。武師城のことは相當の理由あれどもそれは論争外なり。(2) 貴山城は遅くも西曆前二世紀の頃此地方にて重要な都市ならざるべからず。而して此地方にて最も古く世に知られしものを求めば *Khudjend* にて *Alexandria* は普通此地なりといはれ、その以前に波斯王の建てし *Kyropolis* も此處なるべし、唐にても慈恩寺三藏法師傳に出、戰提として此地を記し、*Sultan Fader* の *Memoire* にも此地を以て此地方最古の都會といへり。然るに *Kasan* は元以後に明かに知られ、新唐書西域傳、同地理志に渴塞城とあるが之なりといふ説あるも、尙慈恩傳に遲るゝこと二十年なり。博士は *Kyropolis* 即 *Ura-ti-ne* 説を以て予の説の根據を破るものとなせども、予はたゞ *Khudjend* の古き都市たるを言はんが爲に引きたるのみ、又博士が何等の理由を示さずして *Strabon*、*Herodotus* 等に *Kyropolis* の *Yaxartes* 河岸にありといへるを否定せんとするは直に承認し難し。(3) 是より以下は予の論據の要點なり。先づ貴の音は越と同じく *Kin*、*Ki* の音あり漢の貴霜 *Kusan* 以下唐、宋にも例多し。此點は博士も予が説に贊せり。然るに山の字は博士は古今を通じて *Sei* 又は *Shan* なりといふべし、是れ博士が日本には支那の古音多く傳はれりと言ひ乍ら金剛山・須彌山・大山・靈山の *San* 又は山仙の

音相同じきを忘れたるものなり、又譯は *Sei* 關は古今を通じて山と同じく又説文には戰は單に等しく單の音に *Shan* なし。故に山に *San*、*dan* の音と普通の *San*、*Shan* の音あることを明かなり。然らば貴山は *Kasan* よりも *Khudjend* の方上下共に合ひ殊に地名にては上の字の發音を重入する故 *Khudjend* をいふこと遙に有力なり、且博士が「*Khudjend* は本 *India Kand* を稱せしものが後世 *Khudjend* を訛りては非ざるか」云々云々、*India Kand* の名は何に出でしか。又「支那人が外國の地名を音譯する時に正確ならざることもあるべし。 *Kasan* に不正確なる貴山の字を使用せしこと萬々なしともいひ難かべし」といひ殊更に曖昧にせしは何故か。(4) 史記大宛傳に大夏の都藍市城 (*Balkh*) より東北二千里餘に大宛の都貴山城ありといへり。西域記にも、支那が *Balkh*、*Khudjend* 間を歩いて二千里餘となし、亞刺比亞人の旅行にも行程二十日(一日百里)を要すとなし、露國の地圖には *750* 露里 *500* 哩となす。 *Herman* 氏は漢の一里を四百米としたるが之によれば漢の十里は二哩半となり、五百哩は漢の二千里に當り史記と符合す。而して *Kasan*、*Khudjend* 間は百五十哩にて漢の六百里も更に東北に隔たれり。かくすれば何等の不都合なけれど博士はたゞ「史記漢書の里數には誤多し。大宛國の哩數に限りて絶對的に正確なるを保證し難し」といへるは史料の取扱ひ方に於

て甚だ鄭重を缺けり、(5)漢書の西域傳に據れば休循、大宛、大月氏三國の距離關係は 930(休循大宛間) + 500(大宛大月氏間) = 1610(休循大月氏間)となり、大宛の貴山城は休循より大月氏に往く道筋に當れる筈なるが、Khandjand は之に適し、Kasvin は此要件に協はず。漢書の西域里程は都護の實測に基き、極めて精確なるべきを以て、之を疑ふには確實なる證據なかるべからず。然るに博士は「漢書の里數にも間違あれば有力なる證據とはなし難し」。「休循大宛間の距離は正確なれど大宛大月氏間の距離六百九十里は過小に失す千六百九十里の誤なるべし」とて擅に千字を入れ、又「漢書の作者は漠然休循の西に西に大宛あり、大宛の西に大月氏あるを知り、與へられたる休循大宛間の距離と大宛大月氏間の距離とを机上にて合算して休循大月氏間の距離を作り出せしものなるべし。故に三國の里數を根據として貴山城は休循より大月氏に往く道筋に當ると推測するは曲解なり」といへり。が、る批評は史學研究法上より重大なる粗瀆の論といはざるべからず云々。

## 讀 史 會

例會 三月廿二日午後六時より學生集會場に於て開催、三浦博士 西田、本庄、魚澄、中村の諸學生、粟野、神浦、松野、古田、辰馬等の諸氏出席、先づ建武式目について、三浦博士の解説あり、次で辰馬寛爾君は、最近「考古學雜誌」を賑はしつゝある、中山

醫學博士對笠井新也氏の、漢委奴國王印の出所に對する遺蹟に關する論争に就て、同誌第五卷第二、三號、第六卷第五、六、七號所載兩氏の論駁を精細に紹介する所あり、最後に左の講演ありて午後十時半散會す。

本地垂跡說に對する反動思想 文學士 西 直 二 郎 君

凡そ本地垂跡說に對する反動思想を其性質により分てば三ありとす。一は單純なる排佛思想、二は唯一神道にして、三は復古神道に關する思想なり。今余の言はんとする所は、此等三者之性質を異にし而も相關係するところ深く假りに「枝葉花實思想」とも名づくるものなり。意は神道は根本にして儒教は其枝葉、佛教は其花實なりと説明し、日本の神祇を以て本地とし佛菩薩を其垂跡とす、神祇は本體にして諸佛は是れ假相なりとするものなり。是思想は本地垂迹の正反對にして我國の思想界に於て此の思想の系統は注意すべきものなるべし。足利末期に出でたる唯一神道には此思想を含めり而れども此れ果して兼俱の創意に係るものなりや。清原國賢著日本紀神代卷奥書、藤原時綱古今神學類聚編、此の「枝評花實の說」を説き源を——聖德太子に置くも妄説なり。他に於て注意すべきは太平記「日本朝辭書」の條に、日本開闢を説き天照大神が或時は垂跡の佛と成て或時は本地の神に歸て衆生を化度す、是則跡高本下の成道なりとある跡高本下の成道なる語は又

「舞の本」ゆりわが大臣の中にある「神の本地を佛さばよくも知らざる詞かな、こんほんちのかみこそは佛となり給ふ」と相對比すべきものにして、この枝葉花實説と同性質の思想なり而して尙同範疇に屬する思想は年代的に日本の神を印度の佛よりも古く置くものにして、即神皇正統記、忌部正通の神代口訣、帝王編年記等の開闢記事、この一班を見るべきものなり。この神を主とし佛を垂跡とする思想、日本を支那及印度より開闢古とする思想は神道史上研究すべきのみならず國民の自覺の徑路を考ふる上に重要なものなるべし。

例會 四月廿八日午後六時より學生集會場に於いて開催す。出席者は三浦教授、喜田、西田兩講師、清原、江馬、木宮、中村、魚澄の諸學士、粟野君及び學生諸君と今般短期講義の爲め入浴せられたる河合講師と福井縣史料探訪の爲め出張中の牧野君とを加へて盛會なりき。劈頭先般上京せられたる中村學士は史學會大會の概況及び滯京中の史料調査談を試み、次で左の講演ありたり。

古今和歌集に就て

古田 良 一君

古今集序は紀貫之の作にして文學史上有名なものなることを言を俟たず。然れども果して名文なるか否かにつきては疑なきを得ず殊に往々漢文の直譯の如く思はる、所あるは寧ろ滑稽なりと云ふべし。假名序と眞名序との關係につきては種々の説あれども當時

の學界の風潮より見て先づ漢文にて記し後に國文に翻譯せりとする方至當なるが如し。この序の中にて「古よりかく傳はるうちに」より「古の事をも歌をもしれる人よむ人多からず」までには疑あり。この終の方は文章重複し居るが故に恐く衍文あるべし。ならの御時の何れなるかにつき戸田茂睡は文武天皇なりといひ又聖武天皇なりとの説もありて契沖はこれらを排して平城天皇なりとせり。かくすれば年はも、とせ云々とは合ふべけれど、その他の事實と相違あり。これらの説は貫之を尊敬するのあまり其誤なることに思ひ到らず。古今集仰戀に爲家がならの御時とあるを

錯誤なりと言ひしも見ゆ。果して然らば、鎌倉時代には珍らしき説なり。されどもこれにつき最も明快なる判斷を下されしは香川景樹にして其説古今集正義に委し、予の臆測を以てすれば當時の人々は人麿赤人の外、他の萬葉歌人につきて多くを知らざりしにあらざるなきか。何ぞ憶良旅人家持等を言はざることあらんや。畢竟當時の人士が六歌仙時代以前の國史智識の貧弱なりしものと解してよかるべし云々。

九州旅行談

喜田博士

先般九州に赴き、鹿兒島縣、宮崎縣、熊本縣に至りて、我が古代の遺蹟を調査し、九州南部に天孫種族の遺蹟なきや、又卑人、倭人の研究に資すべき材料に逢着せずやと調査をなせり。大隅國分

に到りしに、此地に隼人塚と稱するものあり、其上には四天王像ありしなるべく今其の中一體を存せり。隼人塚の名は信すべからざるも蓋し此附近は養老四年の隼人誅伐のありし地方にあらざるか、また此附近國分寺に遺れる七重塔には其中の四重古きものを現存せり。こは天平十三年諸國に七重塔を造立せしめられしとき之遺物にあらずやと思はる。鹿兒島市の北に嘗て英人、マンローが調査して土蜘蛛の穴と稱せしものを一見せしに、穴は十四尋の深きものにて迂餘曲折し居れり、恐らくは水穴なるべし。次でもさ日向に歸せしが今大隅に入る志布志の古墳を見更らに南肝屬郡、東串良村に赴けり。此附近は大小の古墳累々として存在し、大塚神社の祀られたる所には前方後圓の大古墳あり、古墳の大きき、廣の構造等大和附近の古墳に類せり、これに據れば從來の薩隅の地に天孫種族の古墳なしとの説は取消さるべからざることをなれり。其他小古墳は皆堅穴式にして他の形式に屬するものはこれを見せざりき。かくて櫻島に噴火の跡を見しに天平寶字八年鹿兒島に噴火あり、ラバ噴出して三島をなし、其形東屋に似たりとの説に合へるものを見たり。歸途肥後に入りて豊田村の貝塚を見る。本縣は昨年末縣令を發して遺蹟、遺物の保存法を講じ居りしが、此際恰も下益城郡豊田村にて一大貝塚發見せられたるなり。此貝塚には貝は多くこれを發見せしも、石器、土器は極めて少し、

而して土器の紋様は稍複雑なるものにして、關東地方に發見せらる、貝塚とは系統の異なるものなるが如し云々  
右終つて最後に河合講師は朝鮮金剛山の僧侶の生活に就いて興趣ある談話ありて午後十時散會す。  
研究旅行 五月十三日、滋賀縣栗太郡及野洲郡に研究旅行をなす  
内田、三浦、喜田三博士、今西、西田、清原、魚澄、中村の諸學士、座田、今村、松野、辰馬、下川、牧及び梅原の諸君參加す。  
京津電車にて大津に至り、湖上志那中港に上陸す。今西助教は清原、辰馬、梅原の諸君と共に、志那村小字上幸なるオカサン山と稱する封土を調査して藤浦觀音寺文書探訪の一行と合せられたり。同寺所藏文書の多くは從來未だ世に出でしことなきものにして、各種の有益なる史料を含むも三浦博士のこれに關する研究を雜纂欄に收めたればこれに譲るべし。但此外當寺の誣弊が秀吉を慈通して山門再興を圖り、主として西塔の興復に任せしとの寺傳に關聯せる秀吉の西塔の奉加帳及び板倉重宗が觀音寺の代官所老蘇村の百姓又助の伴天連休屋を宿泊せしめし罪を責めて京都に召喚せし書狀杯一行の特に注目を惹けるものにてありき。この日總社神社より提出せる石劍は石盤製にて長さ七寸三分中九分内外あり、從來我が國にて發見せられたるものと形式を異にし朝鮮方面

に於て發掘さるものと類似せるは頗る注意を惹けり。一行は同寺本堂(特別保護建造物)前に於て記念撮影をなし、徒歩野洲郡守山町に赴き魚末樓に一泊す。

十四日。早朝守山町東門院に至り桓武天皇の塔と傳ふる石層塔を探究し、犍で守山驛より八時十六分、汽車に乗り野洲驛下車、直ちに小篠原村櫻生に赴き、村の東北端道路の南側に近く存せる甲山の墳を見る。塚は丘陵の尾の上に設けられたるもの、埴輪圓筒見えず、西側に墓壇の入口あるも殆んど埋もれて入るべからず。一行は玄室後壁の小穴より僅に内部に入、調査するを得たり。墳は横穴式にして構造頗る精巧に、内部玄室の中央に家型式石棺安置されあり。其の前半埋もれ且つ一部分破壊せるが玄室は長さ二十尺内外、幅奥壁下部にて八尺五寸五分、同天井部にて六尺七寸即ち断面梯形をなし天井石三枚を以て覆へるを見る。石棺は燧灰岩の彫抜式にて蓋と身より成り、長さ八尺六寸、幅は蓋五尺餘、身四尺六寸三分、高さ蓋は二尺五寸、身三尺六寸あり。蓋には前後に二個の實用的繩掛け突起と兩側に四個の裝飾的突起を有す。其の朱に染めるは埋葬の莊重なるを感ぜしめたり。かくて是と相對し、東南方約一町にある同形状の圓山と稱する墳を調査す。是れ亦墓壇四面して開口し内に甲山と同式の石棺を藏せり。たゞ前者の如く完存せず、墳の羨道玄室と共に下半は埋もれ、石棺亦破

損せり。會員各自土に塗れながら實査をなす。墳の大き羨道玄室を通じ三十四尺九寸、幅玄室にて七尺四寸、同羨道にて四尺八寸あり。構造稍粗なるが大なり。石棺は蓋の長さ九尺四寸、高さ二尺七寸、身の幅五尺ありこれ又大形也。墳を出で、更に兩者の西に接せる天王山を見る。此の塚大なる瓢形墳と傳へらるものなるが精査の結果、丘陵上に二ヶ所少許の封土あるのみにて、其の瓢形墳と稱せられしは基山を誤り觀察せるものなるを確め得たり。更に東南方に連なれる宇大岩戸の銅鐸發見地に至る、明治十六年十四日の銅鐸を出せるもの、土人の談に地下四五尺の場所に小穴ありてその内部に埋めありしと云ふ。其の地勢埋没の状態が銅鐸發見の多くの場合と一致す。これより西南、累々たる圓塚群の間を通じて日吉神社社務所に至り陳列せられたる附近古墳の發見物を一覽せり。齋瓮土器の破片其の主要なるものなりしが同地宇山脇の古墳より發見されし銀製山梶玉のありしは注意を惹けり。

かくて一行は豫定の踏査を終へて歸途に就きしが、今西助教、中村、梅原二君は同郡三上村長の囑に依り、同地の古墳を調査すべく一行と別れて山脇村の横穴式古墳群の間を過ぎ、小篠原村、東南方の淡海三船の墓と傳ふる越前塚を見る。塚は丘陵端に東北向して築かれたる瓢形墳にして、封土存し、埴輪圓筒の破片散在し後圓部には葺石の迹ありて完築せる式をなす。其の後圓部に西向

して横穴式の大石工の壙存し、羨道部は埋もれたるも、後壁の天井に接する部分一部破壊して内部を調査する事を得たり。自然石を組織に積み重ねる室を成せるもの断面梯形をなし室の長さ二間半内外あり。入口部小石を以て覆へるを内部より見るを得べし。從來一般に前期の古墳なりと信ぜられし瓢形墳に後期の大きな横穴式墓壇のあるは注目すべし。これより縣社御上神社に詣り調査を託されたる三上山南麓の古墳を見る。塚は丘陵上に築かれたる高さ一間半位の小圓塚にして、上部に石室の一部露れたり。普通見る形式のものにて土人の或者の信するが如き高貴の人の墳墓とも思はれず、且つ特別にこれ以上の調査をなす必要を認めざるものなりしを以て、今、西助教授は之が説明と共に保存に就て注意する所あり。再び御上神社に還り同社所藏の古文書の調査をなせしが江戸時代のもの其大半を占め、寛正、天正、文祿、慶長頃のものに約四十通を出でず、村民連署の起請文多く、其他永祿二年正月廿七日の定築置目條々、天正十三年閏八月廿四日の豊臣秀吉朱印狀、同廿年九月四日豊臣秀次朱印狀、及築に關する慶長、元和頃の詠狀等ありき、終りて五時十七分發汽車にて野洲驛を出發し歸學す。此行、澤栗太郡長、堀野洲郡長、寺島視學、寺田守山町長、片岡常盤村長、後藤三上村長其他地方有志の幹旋に資ふところ極めて多かりき。

例會 五月廿四日午後六時より學生集會場に於て開催す、内田、三浦、喜田博士、今西助教授、西田講師以下木宮、魚澄、中村の諸學士、粟野、鹿田、今村、神浦、松野、辰馬、下川、牧、梅原の諸君出席、左の講演あり、午後十時半散會す。

#### 細川勝元の修禪

文學士 木宮 泰彦君

鎌倉時代以降、武士にして禪を修するもの少からず、細川勝元の如き其著しき一人なり。正法山六祖傳は彼が修禪の原因を明かにし得べき記事を含む、彼の祖細川頼之は禪道に深く、絶海和尚語録の終にある年譜によるに、嘉吉二年八月、頼之死に瀕せる時、妙心寺第四世日峰和尚と、生死に關する問答をなしつゝ、眠るが如くに長逝せりといふ、頼之の最後を聞きし勝元、亦早くより參禪しつゝありしが、一日、嵯峨よりの歸途、妙心寺内發源院にありし義天和尚に遭ひ、爾來、和尚に從ひて禪を修めしが、まづ一寺を創立せんものと、義天と共に其地を求め、徳大寺實能の所有地の北山にありしものを以て自己の所有地と交換し、一寺を建設す、大雲山龍安寺、これなり。義天即ち自ら開山となる事を辭し、師日峰和尚を第一世となし——この時日峰は既に示寂す——自ら第二世となる、實徳二年の事なり。翌年更に丹波國八木村に米山龍興寺を創め、義天自ら其開山となれり。義天と勝元との關係に就て

は、義大の語録を缺くを以て明かにし得ざるも、正法山六祖傳に二三の記事あり。義天は寛正三年を以て示寂し勝元は更に義天の弟子雪江和尚につきて學ぶ、應仁元年の兵火は、妙心寺並に龍安寺を灰燼に歸したるを以て、雪江は已むなく龍興寺に移れり、勝元、即雪江と接する機會の減少せん事をおそれ、邸宅の一部に堂宇を設け、龍安寺と號したるよし雪江行狀に見ゆ、雪江語録には勝元修禪の深かりし事を示せる二三の例あり。勝元の法名は龍安寺殿宗賢仁榮居士と言ひ、其の宗賢、これを法諡といふは義天により、その仁榮、これを道號といふは雪江によりて附けられしものなり、而して彼の臨終に際しては、雪江を招き、涅槃に就きて質問しつゝ、死せりといふ、其一絲亂れざる最後は北條時頼のそれにも比すべく、雪江和尚が、勝元の畫像に贊を加へたるの中に「窮禪阿漢、示勸僧樣」の句あるは以て彼れが修禪の凡ならざりしを知るべきなり。

次で、梅原君及今西助教は、交々研究旅行の際に調査したる滋賀縣野洲郡小篠原村の甲山、丸山、及淡海三船の墓と稱する越前塚、三上村天王山の古墳に就ての調査報告を試みられ、更に三浦教授は、同旅行に於て閲覽したる栗太郡觀音寺の古文書に關する研究を語られ、最後に内田教授の講演あり。

### 臺灣旅行談

内田教授

余は去四月十六日京都出發、五月三日歸京、前後十八日間を費して渡臺したりしが、今その間に見聞したる事及感想に就きて語らん。基隆港は、恰も佛國のマルセイユに酷似し、日本内地よりも更に歐洲文明の影響の大なるものあり、臺北は金島政治の中心にして、此點よりして内地の東京に比すべくんば、基隆は横濱に相當し、地勢、氣候より京都に比すべくんば、基隆は神戸に當るか、市街は區劃井然として歐洲の都會を偲ぶべきも、艋舺、大稻埕の邊は蕞臺灣人の住する所にして汚穢を極む。艋舺には龍山寺あり、大稻埕には城隍廟、媽祖堂あり、臺灣人の大多數は、廣東、福建よりの移民の子孫なれば媽祖崇拜の如き、南支方面の崇拜あり、市街の西に淡水河あり、時に洪水の恐なきとせず、現今、其防水の堤防を築造中なり、臺灣神社、亦此地にあり。臺南に對する海とては安平港あり、臺北を以て東京に比すべくんば、臺南は京都に比すべく、臺北を京都とすれば臺南は東京に較ぶべし。北白川宮御遺蹟、孔子廟、開山神社、開原寺あり。而して今次の旅行にて得る感想の二三を述べれば、第一にその文明なり。臺灣に於ては、あらゆる階級の文明を見るを得べく、内地にも容易に見られざる純歐洲の文明もあれば、その傍に現代の日本式の文明もあり、更に南方支那近代文明の俤もあれば更に原始的文明もあり、第二は其の人口問題にして、惹いて殖民政策の上にも顧慮を要すべく、

更に吾人の大なる覺悟を要すべき事なり。即ち臺灣に於ける人口を見るに、近來非常の増加を來し、大正三年末の調査によれば三百六十萬人に達するも、其九十二パーセントは本島人にして、内地人は僅かに三〇・九パーセントを占むるのみ、其他三六パーセントは生蕃にして、極めて僅少の外國人あり。然らば其人口の大部分を占むる本島人は如何なるものかと言ふに。南支那人の子孫なる丈に、保守的にして支那的の風俗習慣及信仰を有す、而して此本島人を日本民族的に同化せしむる事の可能、不可能に關しては、私見を以てすれば、極めて急激に同化せしむる事は或は難事ならんも、除々に必ず同化し得べしと信ず、現代の本島人に就

てはともかくも、次時代の本島人に對しては必ず一步を進めたる同化をなし得べし。而して臺灣に於ける内地人は、活氣盛んに見ゆるも、永住する考の人少き事と、早熟早老なるやの觀ある事は注意すべし、臺灣統計協會雜誌大正二年のものに、水科七三郎氏の「臺灣に於ける兒童の發育」と題し、兒童の早熟を表示されたるものあり、臺灣に於ける内地人の健康保全策は極めて重大なる問題にして、我國殖民政策の成否を示すべく、永遠の成功の點に於ても看過すべからず、而して更に是等内地人と本島人及生蕃との文化は早晚融和され、今の本島人今の生蕃の間より、新しき日本人を生じ、内地人の子孫も、其内地の居住者よりも多少異れる

子孫を生すべく、こゝに殖民地的の日本人を生す。しかも彼等の將來や如何。臺灣文明と内地文明との接觸や如何。彼等臺灣人の文明流行と、内地に於ける文明流行とは、交通機關の發達と併行して相互的に影響すべく、この新日本人の舊日本人に與ふる感化や如何。こゝは我日本帝國百年の後を考ふる上に最も考究を要する問題にして、吾人は其理想を如何なる點に置くべきか、其理想を實現せしめんとする設備をなすか、或は自然の成り行きに放任するか、こゝは熟考を要する重大なる問題なるべし云々。

### 支那學會

例會 三月十八日、鈴木助教の支那留學送別を兼ねて學生集會場に例會を開く。會するもの諸教官卒業生學生等凡そ四十名席上高野久太郎君の「伊藤仁齋の性と天道」の講演に次ぎ、狩野博士は「巫の託」と題し大要左の講話を試みられたり。

支那にて今日と雖も猶各地に於て一種の降神術によりて人の吉凶を言ひ又加治祈禱をなして一般民衆の尊信を博し頗る勢力あり。従つて歴代之に對して法律の制裁ありき。されど絶對に之を禁止したるにあらず。治安を害するものにあらずれば概之を默許せり。而して之を業とする者の名稱古來種々あり。端公、太保(男)師婆(女)と云ひ、アモイ地方に於ては巫師・師巫・師公(男)師婆(女)と云ひ、又跳神師公(男)跳神師婆(女)説生婆・走陰婆など云

へるも是れなり。之を雅言を以つてすれば巫と云ふ。今日の巫は道教と關係あれども、元來巫は文獻以前に存し、道教起りて之を利用したるなり。其周に於けるものは周禮・左傳等に多く之を見るを得べく、尙書には其の之を記せるもの極めて少しと雖も、是れ尙書の性質による事にて、周以前の一般民衆の信仰は巫なりしが如く考へらる。尙書伊訓に巫風淫風亂風とありて官吏が歌舞伎樂に耽ることかこの巫の降神に似たるを以つて戒めたるあり。之によりて間接に巫は舞踊をなせるものなることを推知し得べし。更に同君喪に殷の賢人として巫咸巫賢の名あり。之に就いて古來種々の異説あれども、余の考證の結果によれば、巫咸の咸は巫の職業をあらはすべき普通名詞なりしが如し。巫は後に進化して祝となり、祝は更に進化して宗となれり。その變遷の消息は國語彙語に審なり。巫祝は又支那の文學と大に關係あり。巫の研究は支那文化史上多大の興味の存する所。以上は單に古典に見ゆる巫の概畧なり云々。

例會 四月三十日文科大學第八教室に開會。加藤盛君先づ「大宗法疑義」の題下に宗法の由來、鄭注に表はれたる大宗法、毛奇辭說、臆說と立證等の項に分ちて評論し、次に宮岡講師は「雙鏡傳説」といふ題にて麿蜜王に關する鸞鳥の傳説が既に六朝

の頃に起り、唐に至りては詩材となり、遂に之を鏡に銘じたる由來を詳述して古鏡十數枚を參考として示されたり。

卒業生豫饗會 五月二十日學生集會所にて今回卒業すべき佐藤廣治、加藤盛一、高野久太郎、佐々木慧音(以上支那哲學專攻)寺島徳八郎(支那文學專攻)五君の豫饗會を開く。會するもの内藤、狩野、桑原教授、矢野、羽田、今西助教以下卒業生在學生三十餘名。席上佐藤廣治君は「饗説に據る感生帝及び其の郊祀」と題し大要次の講演を試みたり。

鄭玄の周禮大寧。大宗伯。小宗伯。大司樂。掌次。典瑞等の注、史記五帝紀注引尙書堯典注、同燕世家注引君喪注、禮記曲禮。月令。祭法。禮器。明堂位。大傳注、唐李鼎祚周易集解引易豫象注、太平御覽五三三引尙書帝命驗注、詩生民。闔宮箋、孝經邢疏引孝經解、同引論語堯曰注、其の他注疏の各處に引かるる歐、五經異義等に據つて窺ふに、天帝に二種のもの認めたり。一は昊天上帝にして他は五帝なり。五帝又、天神。上帝。太微五帝。天帝。太微之帝。五精神。后帝。帝。天等の別稱あり。而して其の所謂蒼帝靈威仰以下の名稱は緯書にのみ存し、經書には絶てて之を見ず。此等五帝は大微宮に座星あり、五行。方位。季節に關係し、又天象を主る。就中其の最も主なる作用は萬物の生育と帝王の始祖の感生となり。此の感生に對する鄭玄の思想は、孝經解(形疏)。禮記大傳注。尙書

帝命驗注(太平御覽五三) 詩生民。支烏箋等に見るを得べし。その

根據をなすものは緯書と詩となり。但、鄭玄が目して經に於ける

明文と謂へる詩には、解釋上異論成立の餘地あり。故に詩の支烏

及び長發。生民。閭宮等の鄭箋は、之を説くに感生を以つてせざる

毛傳に對比し、その何れが妥當なるかを稽ふるの要あり。鄭玄は

又昊天上帝と五帝とを立て、感生帝を認めたるが故に、祭天にも

相異を來せり。それは禮記郊特牲。祭法。大傳。禮器。周禮典瑞。大司

樂等の鄭注に據れば感生帝の郊祀は冬至圜丘の祭天と別種のもの

にして、三王共に夏至南郊に於てせり。(易緯坤靈圖を根據となす

もの、如し)而して月令注によれば、此の郊祀は春々長日の至る

を迎ふるの外、祈穀の義あり。その事、詩噫嘻序疏引笺胥言に審

なり。魯も亦た周公の故を以つて特に感生帝の郊祀あり。但、こ

は三王の郊祀と異にして建子の月を以つてせり。感生帝郊祀に於

ける配食者は、祭法述ぶる所を誤となし、宥虞氏。夏后氏は顓頊を

殷人は契を、周人は稷を以つてせりとす。祭法注に之を述べたり

之を要するに、感生帝の思想は固より鄭玄の創唱にあらずと雖も

鄭玄の思想中に於ては殊に顯著なる一特色をなし、其思想全般に

影響せる所少からざるを見る云々。

### 西洋史讀書會

例會 四月十八日學生集會場に於て午後六時より開會す左の紹介

ありたり。

八世紀乃至十二世紀に於ける東部及び北部歐羅巴の交通史

牧 健 二君

ヒストリツシエ、ツアイトシユリフト「一九一五」所載、リカード。

ヘンニツヒ氏論文にして、三十頁に互る。大別して二部とすべし

前部十七頁は、題言の示す交通史主として交通系に就きて叙し、

後部十三頁は、當時當地方の重要な海港の今は只名を存して、

其の位置の判明せざるもの三四に就きて考證せる所を記す。其の

要旨左の如し。

一、東部露西亞交通系、ビザンツの隆盛とサラセンの勃興とは、

東部歐羅巴の交通をして、再び盛大ならしめたり、即ち其の交易

の目的物たる毛皮は、ヴォルガ河の中流カザンの附近にありしプ

ルガルに於て取引せられ、通商路は此のアルガルを經由して

南はヴォルガ河を下りてビザンツ或はサラセンと通するあり、西

はノウゴロドを経てバルト海に及ぶあり。南北交通東西交通之に

依て行はれしことは貨幣發掘に因りて知らる。

二、西部露西亞交通系、こは北はノウゴロドに起リロツト河及び

ドニエプル河に沿ひて黒海と通するもの、キエフは其の中間にあ

り。此の交通路は東部歐羅巴南北交通路として當時最も重要な

ものなりき。航海に秀でしノルマンは同時に通商にも秀て此等通

路に依りコンスタンチノープル又はバグダッドに迄往來したりと思はる。

三、東西交通系、前述ノウゴロド、ブルガールを經、ウオルガ河を下りて裏海に入りそれより中央アジアに及ぶあり。キエフを中心として北部獨逸とウオルガ河下流を連結するあり。又ビサンツよりアゾフ海に進みドン河を溯りてウオルガ河下流と通するありかくの如く當時に於ては實に歐亞大陸を横斷する交通路が存在したりしなり。

四、南北交通、廢退の原因、は、此時期の終に起れる蒙古侵入に因る南北交通の中断、サラセン及びビザンツ衰弱に因る東歐交通の中絶に基く。

五、海港の位置に就ての考證、中世に於ける重要な海港のバルト海岸に點在せし其の位置の判明せざるもの少なしとせず、時には其の港の傳説を残すに過ぎざるすらあり。從來此等の土地の舊位地を決定するに、單に死せる言語上の類推にてのみ考證せんことせば愚なり。この研究には交通地理的考察を最も必要とせず。かくて著者はシュリンクスヘアル、ビルカ、ハタビー、ツループ、及びユム子の諸港の位置に就き、自説を掲げたり。殊に最後のユム子の研究には十頁を割き獨逸史學界積年の問題たるユム子、ウオリン論に對して、著者獨特の意見を發表せり。こは研究法上與

味ある實例と言ふべき也。

以上交通史の研究は、其の主要なる史料をアラビヤ人の紀行にあり、最後のユム子研究は、アダム・フォン・プレーメンの記事を以て其の中軸となせり。

例會 五月二日午後六時半頃より大學本部樓上にて開き次の紹介ありたり。

ギリシヤの競技練習と軍事教練 小早川彦一君

こは昨年十月號の「エジンバラ評論」誌上に掲載せられしライト氏の論文にしてその要旨は左の如し。

競技的運動は現代英國人の性格を形成せしむるに與つて力ありしものなるが、古代ギリシヤにては常に賞與を伴ふゲームは重要なものにはあらずりき、されど一種の球戯は已に古くより存在しスバルタにては一般的の遊戯となりしが如し。而も競争はライアの大きな遊戯にして且つ大切な職業なりとせるギリシヤ人に於ては軍隊的教練は睡眠や飲食と同一程度に生活上に必須なるものなりき。スバルタの如き特に然りしものにて男子は十八歳より六十歳に至る迄主要なる戰士にして常にマーシヤル・ローの下に生活せしめられたり。而してこゝに尤も注意すべきは、ギリシヤにては競技にて或る一種に秀づるを以て足れりせず、ここに五技なるものの流行せしことなり。かくして古今を通じて最も完全な

る肉體美はギリシヤに於て發達し、彫刻家に理想的のモデルを示すことなれり。

例會 五月十七日午後三時より學生集會場に於て本學年最終の會合を開く、原、坂口兩教授中村講師其他十餘名來會し先づ左の紹介あり。

### 三國同盟

菅原 憲君

こは一九一五年七月號のノイエ・ホルンド・シャウ誌上に載せられしローレンス・フライヘルン・フォン・マツケイの *Dr. und dreisig Jahre Dreihundpolitik und ihre Lehre* なる論文の紹介なり。即ち論者は一八八三—一九一五の三十三年間に亘る三國同盟の經過を述べたり。其要領下の如し。當初、ビスマルクは地理上、政治上經濟上の關係より伴ふは獨、墺二國と必然同盟すべきを説きしが同時に、國際同盟の通有性として三國同盟の永續すべからざるを看破せり。伊國には、建國以來二派あり、一はバルカンに於るスラブの勢力に依頼し、以て墺國に當らんこと(マチニイ派)、他は大ロシアの勢力を憂懼し、之に備へんとするにあり(カプール派)クリスピーはマチニイ派なるが、後、説を改めて中部歐洲の強國同盟を力説せり、之等の狀況に對し、獨逸政治家は何の爲す所もなく、三國同盟の表面的安靜に安んじたり。さて、伊國にはかのチユニス問題にて佛國と隙を生じたるが、三國同盟の威力之を如何

とものするなかりしを以て、伊國は獨、墺二國に快からず。其後アフリカに於て佛伊の利害合致し、伊國は漸次英佛に近けり。モロツロ條約は獨逸の獨墺との打ち合せなく、三國同盟條約の第七條を破棄し獨逸の利害を無視したるもの也。かくて伊國はアルゼンチラス會議後公然英佛側に立ち以て今日に及べるなり。要するに國際關係上「主義」と稱するものは、國民生存の條件に基くものにしてこの條件の變化に伴ひ主義も亦變ず、この事實を輕視せることが三國同盟破綻の根本原因也。然れどもこの戰役後歐洲の國際關係は面目を一新し、新時代は獨逸にとりて有利なるべく、獨逸は眞偽の友邦を識別して新しき運命を開拓し得べき也。

次に宮崎市郎君の *Huntington 氏の A Neglected Factor in Race Development*. (The Journal of Race Development Oct. 1915) 所載)の紹介あり。了りて一同晚餐を共にし九時過散會せり。

### 地理學研究會

例會 三月廿日(月)午後六時より學生集會場に於て開催す、會員の討論、雜談を目的とし、主として日本の自然人文上の事項に就き話題表はる、につけて討論する事三時間半に及びしが、就中東北地方と九州地方との人情風俗の比較談は最も多時を費したり、會する者内田、田中兩學士及び專攻學生數名なりき。

例會 四月四日(木)地理學研究室にて開催、下田禮佐君の印度氣

候調査の報告あり、氏は印度の氣候を北東季節風季、炎暑季、南東季節風季及び南東季節風退却季の四季に分ち其等各時季について詳細なる説明ありしが、印度の産業上季節風に伴ふ雨量は密接の關係あるものにして其雨量の如何は印度農業の豊作と飢饉とを齎らす事なるを以て季節降雨の豫知は最も重要な研究問題なり、而して此季節降雨は之と關係ある南東貿易風を調査するを要す、一八九六、并に一八九九年の印度の乾乾は濠洲及南亞のそれと其時期を同じくしモーリシアスにては印度のそれに先立ちたり。

さいふが如き又は、ナイ、ル、の、洪、水、と、印、度、の、雨、量、と、は、比、例、す、る、事、、亞、刺、比、亞、海、と、ベル、ガン、灣、と、の、雨、量、の、多、寡、は、相、反、す、る、事、、ヒ、マ、ラ、ヤ、の、雪、が、永、く、融、け、ざ、る、と、き、又、は、五、月、頃、に、降、雪、あ、る、時、は、平、野、の、温、度、は、低、下、す、れ、ば、季、節、風、の、來、る、は、後、る、が、故、に、産、業、に、及、ぼ、す、影、響、は、惡、し、な、、ご、い、ふ、紹、介、は、趣、味、多、か、り、き、。

八瀬行 四月九日、兼ねて研究会の調査中に係る八瀬村の村社八幡宮の祭禮の日なるを以て内田學士は同地に遠足視察せるが祭禮の次第、高殿の制度及其服裝、昇丁の服裝等を始めとして古風と認むべきもの多く、又坂本山王の祭禮に類似せる所も少なからず競馬の騎手の風容亦談るべき所多かりしと、

例会 五月十一日、下田禮佐君の印度産業調査報告あり、農業に就きては地質、氣候との關係、土地制度、耕法、人工灌溉の種類

及利用法を述べ、農産物にては米、小麥、雜穀に就きて各論じたる後、黃麻、棉花、茶、珈琲等を叙し最後に牧畜、製革及びブラック工業等を進べぬ。

### 京都市教育會の史蹟表彰

京都市教育會に於ては從來京都市内に存在する皇室の御事蹟を始め、勤王家、志士、碩學、偉人等に關する史蹟の調査、表彰、保存の途を講じ、既に法勝寺、平氏六波羅第、兩六波羅政廳、法住寺殿、法成寺、室町殿、持明院、聚樂第、所司廳、弘文院、大學寮、閑院内裏、東三條殿、高松殿、本能寺、河原院、鴻臚館の舊蹟に標石を建設したりしが、本年五月更に左記十九箇所を撰定し大正五年度の事業として其遺趾に石柱を建つる事とせり。

高瀬川開鑿者角倉邸趾(河原町、二條下)伊藤仁齋古義堂趾(東堀川、下立賣下)山崎闇齋邸跡(葭屋町、下立賣上)頼山陽山紫水明庵(東三本木、丸太町上)阪本龍馬寓居趾(河原町、蛸薬師上)梁川星巖邸趾(川端、丸太町下)本阿彌光悅邸趾(小川通油小路、今出川、上五賣間方一町)石田梅嶺邸趾(堺町、六角下)橘逸勢邸趾(油小路、堀川間、姉小路、御池間方一町)横井小楠邸趾(下御靈神社前)木戸孝允邸趾(土手町、丸太町下)木下順庵邸趾(錦小路、室町下)淺見綱齋邸趾(錦小路、高倉西)武内式部寓居趾(鉄屋町、丸太町下)林道春邸趾(新町、四

條上)梅田雲濱(烏丸、押小路下)五辻殿趾(五辻通、淨福寺西)  
松永昌三齋習堂趾(東堀川、二條下)二條富小路内裏趾(富小路、二條上)

但その後閑くさころに據れば、本阿彌光悅邸趾は、本阿彌宗家の邸趾にして光悅のものならずとの説出でしより今尙ほ考究中なり。

### 風俗研究會と有職保存會

曩に明治四十四年我國風俗史の研究を目的として創設せられたる風俗研究會は大典記念事業として機關雜誌風俗研究の發行を企て本年三月に至りて其創刊號を發行し、續いて五月第二號を發行せり。今これを見るに、第一號に於いては文學士林森太郎氏の萬葉集に表はれたる寧樂時代の風俗、文學士江馬務氏の平安朝の甲冑に就いて以下有益なる各種の論文あり、第二號には山科言繩氏の東帶と衣冠櫻井秀氏の掩韻の遊について、文學士阪倉篤太郎氏の色の話、文學士江馬務氏の空也常風俗等の記事あり、凡て和紙を用ゐる紙數多からずと雖尙ほ木版彩色の美麗なる口繪を挿入せり。從來同種の刊行物なきにあらざりしも、風俗志林、風俗叢報等前後相次いで廢刊せしは、吾人の深く遺憾とするところなり。吾人は學界の爲め切に同會の持久的發展を祈らざるべからず。有職保存會は有職故實の研究を目的として明治四十一年一月京都

に創立せられたるものにして、山科言繩氏を會長とせり。同會も亦其事業の一として雜誌有職を發行することとし、其卷一を大正三年六月に、卷二を同五年二月に出して、山科言繩氏、子爵清岡長言氏、文學博士三浦周行氏、文學士江馬務氏等の講演筆記を載せたり。由來京都は衣冠の都と稱せらるゝも、明治維新以來歐米文化の移入と共に、有職故實の事は一部の人士を除き、一般には殆ど忘れられたるが如き觀あり、昨秋今上陛下即位の大典を京都に擧げさせらるゝに迨び、典故儀例の事復世人の注意に上りぬ。吾人は亦京都に相應じき同會の熱心なる同好者に依りて健全なる發達を遂げんことを望むものなり。

### 飛驒史談會近況

本會は最近飛驒地方方言及び口碑傳説の蒐集に努め順次飛驒史壇誌上に發表し、後にこれを總括して刊行すべき豫定なり。また飛驒國史編纂の豫備事業として、同會岡本利平氏が約三十年間に亘りて蒐集したる「飛驒史料」の刊行を企て、同氏は最後の整理の爲め五月下旬より約三週間上京して史料を訪れ、本年七月頃より順次毎月約二百頁を刊行し、三千頁内外を以て完了すべきなり。又本年九月客冬贈正五位の恩命に浴したる郷國第一の國學者田中大秀翁の贈位奉告祭執行に付き本會主催の下に翁の遺著遺品展覽

會を開催せんぞす。(飛驒史談會報)

## 歐米史界

亞米利加史學協會大會の概況 昨冬十二月米國にては史學大會が久方振にてワシントンに開かれたり、亞米利加史學協會例年定期の大會は一八九五年以來東部及西部諸市並に首府に於て三年一巡の規定にて開かるゝこととなりしが實際はこの規定通に行はれずワシントンに於て大會の開かれしは過ぐる一九〇一年以來今回を以て初めてなりとす。されば十五年振に協會の本部たる首都の地に開催せられし昨冬の大會は例年に比して一層の盛況なりしことを想察せずんばあらざるなり。今最近着の Amer. Hist. Rev. に據りて其概況を左に報ぜん。

大會は十二月二十八日より三十一日に至る四日間(New England Hotel)を本部として豫定の日程に従ひ開催せらるゝ來會者四百三十名を算せり。當時恰も諸種の學術的會合が首都に於て一齊に催されし折柄なれば史學大會は例の如く是等の諸會と連絡を保ち、或は合併して集會を開きし事も屢々なりき。殊にかの亞米利加經濟學會と連合せし會合に於ては本年一月號の Amer. Hist. Rev. 卷頭に載せられたる Stephens 教授の「國民主義と史學」なる講演ありたり。史學協會に於ける數年の懸案たるワシントン國民文書館建設に關する會議は第一日の午後を開かれ、ハーツァー

ド大學の Tansie 教授等の講演あり、又各地方史學會及歴史教員の協議會にては夫々諸般の報告議事を行へり。次に愈々本大會に於ける研究發表の主なるものを述べんに、古代史に關する特定の研究問題は「古代に於ける國際的競争及戰役の經濟的原因」にして、これに對し Ferguson 教授は、古代希臘の競争が經濟上の原因に由ること少からざるは勿論なれども、他に諸種の原因存在することを認めざるべからず、彼等は土地の爲商業の爲に戦ひしも、又統卒者國王の虛榮野心を充たすが爲、國民のプライドを満足せしむるが爲、恐怖の爲復讐の爲に戦へり、只戦争を好むが爲に戦ひしことはなかりしを述べ、Botsford 教授は羅馬の各戰役の起因を觀察して、經濟的動力は或程度迄働き居れるも他の諸種の動機例へば防衛、時には個人的野心が屢々其因をなし居り、帝政時代の戦争は殆ど總て防衛的なりしと論斷し、其他の諸氏も經濟的原因を以て古代戦争の唯一主因となすに反對せり。中世期に於ては拓植占住問題の研究にして、シカゴの Thompson 教授は獨逸民族の東方拓植に就いて、Howard L. Gray 教授はアングロ・サクソンの占住に就て、Eugene H. Byrne 教授は移住民としてのゲルマン人に關し、Constantine E. McGuire 氏は西班牙に於ける僧院の拓植に關して夫々有益なる研究發表あり。Thompson 氏は

一面に於て西方獨逸に於て大地主領及び封建制擴充の結果、小土地所有者及土地を失ひしものが東方の人口稀薄なる土地に新運命を開拓するに至りし經濟的社會的動機を説明し、他面に於てシャーンマン時代より十三世紀に至る連續的の境域擴張及ヌラフ領域獲得の形勢を尋ね、更に占住獎勵の機關、矩形測地法、拓種方式を述べ、最後に獨逸人の東方運動と亞米利加史の西方運動との比較論を試みたり。Crew 氏は地名を以て主なる研究資料となし比較上代表的の五州を挙げ、ins-tam の語尾を有する村名は第一期即ち東部占住を示し、-ton に終る村名は第二期即ち中部占住を現し、-ley の村名は第三期即ち西部占住を指すものなり、次にBiltingham, Harlington の如き -ing- の地名に就いて、このシイラルが父祖名を意味すとなすは、不確實の說にして、こは時に -hills を意味し又屢々 'bedouging to' の意義を示し、決して 'deccendants of' を現すに限らず、さればかゝる史料を根據として、從來史家の想像するが如く初期のアングロ・サクソン社會が民主的組織なりしとするは早計にして寧ろ照領的即ち貴族的組織なりしと見るが適當なるべしと論ぜり。Byrne 氏はゲノア人の拓種が本土の Commune に於ける商業上政治上の狀況と密接の關係あるを説き、シリア植民地の興敗とゲノア本土に於ける政治的沿革との關係を述べ、McGinn 氏は、ホメダンより奪回せし西班牙領

土に對し諸種の尙圍が其開拓に熱中せし功績を説述せり、近世史に於てはコロンビア大學の Robinson 教授の發表せる論文「國民主義の史的觀察」を中心として國民主義に關する幾多の華々しき論議現れたり。Robinson 氏は國民主義が團體的、感情の一種にして、この感情は人類の所謂社交的本能より發せるものなりとし、史上に於ける社交的團體たる家聲、種族、都市、ギルド等を觀察し、更にシゼロの愛國心に對する態度、ローマ帝國に對する當代の思想を述べ、次に封建時代より國民的國家生成の現象を目してこは現代の意義に於ける國民的感情を發育せしむるものにあらず其中心概念は國家に對する市民の忠誠よりも寧ろ君主に對する臣下の忠勤にありしなりと斷じ、現代の國民的感情は民主主義の副産物にして、佛革命及ナポレオンの事業によりて著しく發達せしめられたり、而して此國民主義に逆行し來れるは現代の國際主義にして、國民主義が原始的の氏族の感情に基き固有の人間の偏見と結合せる間、國際主義は公明なる思想意識的なる修整を要求するなりと説けり。これに對し開始せられたる論議に於て、Kronthal 教授は國民主義と經濟的利害との關係を論じ、Laprade 教授は Robinson 氏の國民主義を以て民主主義の産物となす説に反對し、英佛に於て國民主義は確かに民主主義に先行せりと言張し、かく

の如き感情、これに伴ふ制度は各時代に於て其特殊問題を解決するが爲になされし實際上の奮闘より生れ出づるものにして、寧ろ自然的進化的產物たり、次の stage なる國際主義も同様に、國民主義の下に解決し得ざる問題が、これにより處決し得られ必要を充し得らるゝが故に起り來れるものなりと説き Norman 教授も亦國民主義は種々の力の種々の争闘の間に働きて其結果產出せられたるものにして、これが國際主義にも等しき一層擴大せる國民主義に到達すべきを豫期すべきなりとし、Binglow 氏は實際主義を以て國民主義に代るものなりとの説を疑ひ、こは只一層擴大せる國民主義に移るものに過ぎずと斷じ、Jenkins 女史はバルカンの國民主義に就ての觀察を基礎として、教育の propaganda が國民主義を創造すべき主なる原動力ならば、この二者は又結局國際主義をも同様の勢力たらしめ得べしと述べたり。尙これと連絡すべき問題即ち「英帝國に於ける國民主義の發達」なる題目はかの亞米利加政治學會との聯合會に於て論ぜられたり。この席上 Tironis 教授の論文發表あり、次でモーニング・ポストのアンソントン通信員 Manrice Low 氏は先づ植民地に關する英政策の史的發展を概説したる後現時の戦争により實際上獨立せる國民より作らるゝ帝國は國民的感情の力により比類なき堅實なる性質を得、地方的自由自治制は却て帝國統合の結束を鞏固ならしむるものなることを明

確に證明したりと熱辯を揮つて力説せり。これに次ぎてエールの G. F. Adams 教授は地方的獨立、帝國統合の同時的發達の三大目標たる、クラッドストン第一次内閣時代に成就せし植民地と本國政府間の關係に就ての感情政策の變化、南アフリカ戦争、現職役に就て論議を開き、Andrews 教授は植民地統治に關する十八世紀の英政治家の頑迷なる態度と現帝國に沸れる忠愛の情を生み出せる公明なる寛容政策とを對照し、Binglow 氏は帝國の堅實強固は誇張し居られざるやと疑ひ、最後に Stephens 教授は帝國の強固なる基礎として詩賦とこれに伴ふ感情を擧げたり。亞米利加史に關する論文にては Taboock 氏のコンパス以前に於ける白人の亞米利加渡來に就て、Davenport の一六四八年に至る亞米利加に對する歐洲列國の外交に就て、カリフォルニア大學の Moses 教授の南米に於ける十八世紀の社會的革命に就て及 Carrier 氏のキエバ、教會史の資料に就ての諸研究發表あり。右の内 Davenport 氏は亞利加に關する歐洲列強の初期の條約に就ての多年研究の結果を基礎として、西葡兩國の米洲通商及領有權の獨占到對する佛英蘭諸國の交渉を説き、一五五九年の Catalan-Cambresis 條約迄の第一期にては佛がこの獨占到對する最も手強き反對者として多年の交渉中、佛は Spanish Indies に通航すべきことを要求せし

が、該條約により Indies に就ては記述せざるも、口頭の和協にて西佛兩國民は本初子手線の西方に於て相互に敵對して自由に行動することゝ定めしが、佛に於ける宗教戰爭中に於ける西葡獨占の破壞に努むる主動者は英國にして、一六〇四年の英西條約により、Indies 通航に關する規約文は兩國各々其解釋を異にすれど、兎に角英は Virginia に植民することを得たり、一六〇四——四八年に於けるこの紛争の主人公は蘭國にして、一六〇九年の十二年休戰條約により閣總督は婉曲なる語句の裏に西印度通商の容認を獲たるが、一六四八年の條約は遂に亞米利加に於ける、通商領有權を明確に讓與せしめたり、而してこの三時期中に於ける西葡獨占の侵害者たる Jean Ango, Hawkins, Drake, 及和蘭西印度商會は各々資本家のシンチケートを代表し政府の擁護を受けて通商と奪掠とにより利得を收めたりと説述せり。Moscos 氏は十七世紀に於て西班牙により確立せられし南米の社會秩序が十九世紀初頭の新しい革命的社會に遷移し行ける事狀を述べ、新精神の萌芽は既に十八世紀の初期に認め得べく、植民地に生れし所謂 Creole 階級は大に増加し智識進歩せるに對し、西植民政府の嚴酷なる統制は Creole-justice の反對黨を生ぜしめ獨立の意志を促すに至れるが、ルイナ十四世治下の佛統治は幾分寛大に向ひしも、幾許もなく古き苛酷なる純西班牙風の統制に復歸して不滿の聲は更に大

となり、官吏階級は特權を擁して反動的立場にありて新しき社會に次第に離隔し社會的革命的革命は其内面に於て全く完成し、十九世に入るや遂に爆發するに至れりと述べ、革命史に於ては David Hill 氏が佛憲政主義派とフランクリン氏の關係に就て Chadwick 海軍大將が C. C. の伯の行動に就ての論文(但し代讀)及 Captain Clark の革命戰役に於ける陸海軍記録蒐集事業の報告あり。右の内後の二者は海戰史學會との聯合會に於て發表せられしものなり、尙この聯合會に於ては Captain Rees は Brandenburg の英米戰に就て、及 Fish 教授の一八六一年に於ける Wisconsin 義勇兵組織に就ての論文發表ありき。合衆國の内政史に關しては I. B. Schmidt 教授の米國農業の經濟史に就いて、V. S. Clark 氏の「一八二〇——一八六〇の合衆國に於ける政治思想に及ぼせる製造業の影響」に就て、Tarnell 女史の十九世紀前半に於ける米婦人の教育に就ての諸研究現はる。最後に W. I. Hill 教授のメキシコに適用せらるべきモンロー主義に就ての論文出でたり。Schmidt 氏は米農業史の重要なるを説き、そは單に諸般の農事上に於ける進歩各時期に於ける農民の注意を占めし問題のみならず、農業と他の産業との關係、農民の全生活我國國民の存立に對する農業發展の影響なる大問題を含有すまじし、史家に對して、公有地の歴史、

特に主要なる農的工業の歴史、各洲各地方の農業經濟史、農民組織及農勞動農具の歴史、農業發展に對する移民の影響、農生産品の輸送、市場及價格、農業の financial legislation の關係等の歴史を攻究すべき必要を述べたり。Clark 氏は一八一五年以後熟き工業的利害が政治的勢力の一として起り國內工業を保護し得る national government を強めんと圖り、表面上は憲法說に基く所の反對を惹起せしか、この反對も實は各地方の經濟的利害の不一致に由れるものにして、この利害の不一致は奴隸制の存立なくとも各派の公的政策に對する態度の相違政府に就いての所説の相違を説明するに足るべく、一時製造業は國土の經濟的差異を増し黨派的不和を重ねしが、生産の共働的方式は其繁榮の爲に有力なる政府に依頼するが故に、次第に國內に於ける密接鞏固なる政治的關係を生ずるに至り、政府の統合強固は直接に工業勞動者及使役者に影響し、社會の interdependence は工業の新組織擴大によりて次第に顯著となり、政治上の諸制度はその權威職務を擴張することによりてこの變化に應じ行けりと言述す。以上幾多の研究發表に加ふるに史學協會の重要な議事諸般報告ありて盛大なる昨冬の大會は終了せられたり。

『獨逸戰時講演集』一昨年九月より昨年五月に亘り今次の戰役に關する伯林大學諸教授を主とせる獨逸の碩學大家の講演が伯林市

に於て開かる、こゝに二十五回に及び、其講演集は近時 "Deutsche Reden in schwarzer Zeit" の題名の下に二卷の假綴冊子となりて公刊せられたり。今 Rev. Hist. に據りて該書に載せられたる各講演の題目、講演者並に講演せられたる日附を左に掲げん。

- 獨逸語學教授 (Gustav Roehle (一九一四年九月三日))
- 獨逸語學教授 (Otto von Guericke (同 九月十八日))
- 獨逸國民の軍士的性格
- 近世史教授 (Hans Delbrück (同 九月十一日))
- 獨逸藝術と獨逸文明
- 哲學教授 (Adolf Lasson (同 九月二十五日))
- 吾人の既に得たるもの及尙得たるべからざるもの
- 教會史教授 (Adolf von Harnack (同 九月二十九日))
- 獨逸語學教授 (Kocht Zum Kriege 及 Siegespreis に就て)
- 國法學及行政法教授 (Wilhelm Kahl (同 十月九日))
- 一八一三年—フイヒター—一九一四年
- 哲學教授 (Alois Riehl (同 十月二十三日))
- 法の力に就いて
- 羅馬及獨逸市民法教授 (Theodor Kipp (同十月三十日))

戦争の宗教

戦争の國民經濟

新約書註解教授 Adof Deissman (同 十一月十二日)

政治學教授 Heinrich Herker (同 二月二十六日)

Nibelungenliede に就て

英政策の變遷 Byron 及今日の英國戦争抒情詩

刑法及刑事訴訟法教授 Franz von Liszt (同 十一月十八日)

英語學教授 Alois Freundl (同 二月十二日)

戦争の原因及其世界的意義

世界戦争とスラブ

政治學教授 Max Sering (同 十一月六日)

スラブ 語教授 Alexander Bruckner (同 三月五日)

Ernst von Wildensbruch の國民思想 近世獨逸語學及獨逸文

歴史に於ける正義

學教授(ギムナシウム) Berthold Litzmann (同 十一月二十六日)

市民法教授(ギムナシウム) Rudolf Stammeler (同 三月二十九日)

現在に對する Psalmworte

吾人の戦争に於て得たる所及失ひたる所

アンツリア學教授 Friedrich Delitzsch (同 十二月十五日)

地理學教授 Albrecht Penck (同 四月三十日)

戦争に於ける非觀論と樂觀論

戦争の Bergpredigt

Wilhelm Kahl (一九一五年一月八日)

實際的神學教授(ギムナシウム) Otto Panngarten (同 五月十日)

戦争の文化の進歩

獨逸國粹主義の形象美術

系統的神學教授 Reinhold Seeberg (同 一月十五日)

美術史教授(ギムナシウム) Alfred Schmidt (同 五月廿日)

世界戦役中の亞米利加 羅馬法及普國法教授(プロヴンツラッ大學)

(右の内括弧内に大學名を附せるものは總て柏林大學なり)

Rudolf Leonhard (同 一月二十日)

Rev. Hist. 記者は右の諸講演を評して、これ孰れも普國的氣分の

獨逸の東部戦争 史學教授 Otto Hoetzsch (同 二月五日)

漂へる首部の穿圍氣中に於て發表せられしものとて政府御用的

神聖戦争 民法刑法及法理學教授 Heinrich Kohler (同 二月

精神に充ち、獨逸全體の意見を代表せるものにあらず、而も彼等

十九日)

は獨國民が世界に於ける最平和的の國民にして、戦争は自國を滅

視せる不信の對手國より仕懸けられしものならば、國民は須く敵が倭犯を斷念せる迄奮闘せざるべからずと主張するに於て一致し居れりとの附言せり。(植村)

## 會報

例會 三月廿五日午後一時より文科大學第九教室に於て例會を開き文學士有高嶽君の「元代の交鈔に就いて」文學博士内田銀藏君の「サー・ウイリアム・テンブル」を題する講演ありて午後六時過散會す。

四月廿二日午後一時半より同教室に於て例會を開き、文學士濱田耕作君の「シチリア旅行談」及び喜田博士の「遺物遺蹟より見たる九州太古の民族に就いて」を題する講演あり午後五時半過散會す五月廿七日午後一時より同教室に於て例會を開き、文學士焦澄總五郎君の「高野山領莊園に關する研究」、文學博士坂口昇君の「ランプレヒトを憶ふ」、文學博士桑原隱藏君の「再び大宛國の貴山城に就いて」を題する講演あり、午後六時過散會す。

史林編輯會 四月十九日文科大學陳列館に於て第三號編輯會を開き、三浦、桑原兩評議員、各編纂委員出席す。五月八日再び第三號編輯會を開き、三浦、小川兩評議員各編纂委員出席す。

### 寄贈交換圖書

史料通覽 中有記第六。帥記、水左記 日本史籍保存會  
國史叢書 安見太平記。芳野拾遺物語 國史研究會  
櫻木物語。三人法師

細々要記。衣倉之記

千葉傳考記。小田軍記

小田天庵記。房總軍記

里見九代記。武田三代軍記

甲亂記。理慶尼の記

甲陽道冊錄

先哲叢書。立花遺香

銀臺遺事。同拾遺

先哲叢書後編

佐藤信淵の農政學說

佛教史論

田中大秀翁

東洋學報 二、

考古學雜誌 三、四、六

史學雜誌 四、五

伊豫史談

國史研究會

東北農科大學  
境野黃洋

飛騨史談會  
東洋協會

考古學會  
史學會

伊豫史談會

飛驒史談

飛驒史談會

會費領收報告

(振替貯金拂込のものに限る)

(大正五年三月十一日より六月十日迄に受領の分)

一金壹圓五拾錢(大正五年分)

口入田 覺了 北峯 順修 田中 俊清

一金壹圓貳拾錢(大正五年上半期分、四拾五錢預り)

西村 喜一郎

一金壹圓貳拾錢(大正五年分)

大谷 徳馬 有田 好繩 荻田 元廣

下村 三四吉 稻葉 倉吉 龍 肅

小松 信一 岩橋 小彌太 高屋 善吉

大西 源一 塚田 武馬 大宮 武麿

森 彦太郎 三原 玲珠 藤井 準一郎

和田 清 衣笠 健雄 大橋 金造

鳥野 幸次 上村 治八

一金壹圓貳拾錢(大正下半及大正六上半)

一金壹圓(大正四年二、三期分)

堀 常次郎 新町 徳之 津田 和一

寺田 貞次 西村 時彦 須甲 理喜

重田 定一 植木 直一郎 谷井 濟一

一金壹圓五拾錢(大正三年三期、四年一、二期分) 中山 再次郎  
一金貳圓(大正三年分、四年一期分) 名越那珂次郎

一金壹圓貳拾錢(大正四年二、三期分、貳拾錢預り)

井上 以智爲

一金壹圓五拾錢(大正四年三期、五年上半期分、貳拾五錢預り)

蜷川 第一

一金五拾錢(大正四年三期分)

岩田 覺藏

本號は記事輻輳につき  
紹介欄は次號に譲る